



## 『動物園学』

村田浩一，楠田哲士 監訳

2011年8月 文永堂出版 発行

641頁 定価 9450円

森 昇子・浅川満彦（酪農学園大学 獣医学類 感染・病理分野）

これも研修の一環で書籍紹介を行うので、前半を新人の学生・森 昇子さんをお願いした。当初、毒にも薬にもならない（失礼）中立的なものを期待していたが、彼女が興味のある動物福祉（健康維持という視点も含めて）について、かなり深く論考された（悪くない）。そうすると、私（浅川）はできるだけ、広範囲の読者を想定し、網羅的に書きましようと思気込んだ。されど、結局、散歩のようなことになってしまった（こっちの出来はイマイチ）。

（文責 浅川）

「動物園（以下、園）飼育・展示動物の管理，行動，福祉といった現在の園の実践に活かすことができる全ての分野を網羅している本がない」という不満があった。飼育管理，飼育下繁殖，動物福祉，保全，研究などを個別具体的に記し，社会への役割を明確にする。そのような動機でこの本は創られた。対象は園関係者だけでなく，園に興味のある学生への教育的配慮から，略語・専門用語一覧，コラム・話題，参考文献表，設問等を併記した。本書は次のような章から成る；序，園の歴史と理念，園を取り巻く法規制，行動，動物の個体識別と記録管理，飼育施設と管理，動物福祉，環境エンリッチメント，飼育下繁殖，保全，健康，給餌と栄養，人と動物の関係，研究，園を有意義なものとする方策。

私（森）は，動物福祉に関する記述に的を絞り，読み解いてみたい。第7章「何が園動物の福祉を損なわせるのか」の原因として環境問題，行動制限，飼育環境への適応が挙げられている。福祉を損なう原因を理解することで，第8章「環境エンリッチメントがどのような着目点で行われているか」をより理解することができた。第7および8章では，「ある事象が福祉を損なわせているのではないか」，そして「環境エンリッチメントの評価法の研究とはどのようなものがあるのか」の記載もあり，今後，この方面の研究を指向する上で，とても参考になった。もっと具体的に告白すると，私（森）は監訳者の楠田先生が取り組んできたような糞便を用い，その中のストレス物質を検出して健康管理

の方法を確立したいという夢がある。したがって、p. 249 (box 7.3) の糞中コルチゾールの応用の記述には目を奪われた。

第 11 と 13 章「園動物の健康管理」では、疾病をいち早く認識するための指標・予防医学（健康診断、検疫、ワクチン接種、衛生管理など）が、もっとも興味深かった。健康維持は動物福祉の要である（と実感された）。たとえば、脚のケア。有蹄類では蹄の成長は様々な要因によって影響を受けているが、これを展示施設の工夫で自然な形で蹄が削れる床を選択することは、福祉にかなうであろうし、第 8 章の環境エンリッチメントに即しているだろう。予防医学に利用されるハズバンドリー・トレーニング（飼育管理のために行われるトレーニング）は健康診断におけるストレスの軽減や前述の削蹄などで、麻酔の必要性を軽減に繋がり、福祉と大きく関係していることが新鮮であった。

最後に学生の立場として一言。園に関心のある学生は本書に目を通した上で動物園実習等に臨まれることを勧める。全くの基礎知識無しに園実習等に参加するのはあまりにも失礼であると直感したからだ（と、同時にいままでの自分を強く恥じたい）。園という特別な環境で過ごすことで、私自身の視点に変化が生じ、実習前には気にも留めなかったことを疑問に思うようになる。この本で得られた知識はこのような状況において、そのような生きた疑問を自分自身で考える手助けとなるだろう。次の園実習が待ち遠しい。なお、本書は欧米の事例が中心なので、日本園との比較で有用文献となるし、海外園視察も渴望させた。（文責 森）

本書監訳者・村田氏が序文で記しているように、原題が『Zoo Animals-Behavior, Managements, and Welfare』であるので、本書は園（一部水族館）で飼育・展示される動物（ほぼ爬虫類・鳥類・哺乳類のみ）の生物科学のテキストである。また、原典の著者 3 名はいずれも、英国を拠点にした生物・行動学者あるいは熟練した園飼育担当者で（獣医師ではない）、動物看護学や応用動物学など視点からも論述されていることから、この分野の教員学生は必読であろう。動物を扱っているのに、本書に対比されるものは、Fowler らの「獣医臭い」シリーズとなろう（この第 5 版が、中川、2007）。Fowler 本は目の前の動物の詳細情報を得ようと必死な獣医師・学生にとっては間違いなく有用なもの。しかし、彼らがオフ時に、知的興奮を得たい読み物としては Fowler 本はちょっと…。その点、まず間違いなく、本書『動物園学』は獣医師・学生とっても優れた読み物となるはずだ。

ところで、繰り返しになるが、いくら村田氏が宣言しても、また、彼の強い思いは十分理解できるとしても、本書は園飼育・展示動物に限定した書なので、「動物園学」という邦題とするには抵抗

を受ける可能性がある。たとえば石田（2010）が扱ったような園自体の歴史、計画、経営なども盛り込まれたものを想像されてしまう可能性があるからだ。が、無論、致命的ではないし、私（浅川）自身「家畜を対象とした学問（現行の獣医学を、村田氏は指している）に染まった」1 人として、彼の言説には共感している。とにかく、動物園をアカデミックな場にしよう！むしろ、村田氏の性格を知るものにとって、この確信犯的行為は、宣戦布告と受け止めたい。

まじめな話はここまで。「散歩」に入りたい。まず、本書では多数の写真が使われている。大正解である。600 頁を超える本書のような分厚い代物で、文字ばかりでは、題名云々以前に購入されないからだ。さて、それら写真群中、もっとも多用されているものは「ペイントン動物園環境公園」に由来する。原典第 2 著者の Melfi 氏が当該園に勤務されていたことが原因と目される。実は私（浅川）にとっても、この園は鮮烈な記憶がある。p.392 にあるように、ロンドン動物学協会がヨーロッパヤマネ（以下、ヤマネ）再導入計画を主導し、当該協会の傘下であるロンドン動物園の獣医師が放逐までに結核 TB の検査をしている。この作業、実はこの作業従事者は獣医師はたった 1 人、ほかは「意欲的な修士課程院生」が行っている。私は、2011 年春のある週末、この作業に加わった。当時、私は同協会が Royal Vet Coll と共同開講の野生動物医学専門職大学院に在学しており（詳しくは、Sainsbury ら、2001）、その課程主任でロンドン動物園の Sainsbury 獣医師と伴にペイントン動物園環境公園に赴いた（もう 1 人の院生は、スペイン人の女性獣医師で、現在、ロンドン動物園勤務）。到着してから入院隔離室のような狭い部屋で、膨大な数のヤマネについて、1 頭 1 頭イソフルレン麻酔を施し（本書 p.66 や 151 のように）、体部計測と左右耳介背面への TB 診断液投与（牛が右、鶏が左、いや、逆かも知れない）をした。十数時間立ちっぱなしの作業で、なぜか、しばしの休息であるはずの昼と夕、2 回の食事（Tesco か何かのスーパーで売られるツナのサンドイッチ）も、同じ室内で立ちっぱなしであった。紅茶もなく、おおよそ、英国らしからぬ修羅場であった。帰りの車中、運転をしながら、奥さんからの携帯を受け、「クレージーだって」と弱々しく我々に報告する Sainsbury 獣医師に同情しないものは、おそらく、この世にいないであろう。と同時に、私より年若い彼を強く敬愛した瞬間でもあった。おっと、焦ったか、この報告の直後スピード違反チェック用のカメラのフラッシュの閃光。どうやら、Sainsbury 夫妻には、別の問題も発生したようだ。

このように華やかに見える英国の保全施策の舞台裏は、とても

過酷な状態であると知ったのが、ペイントン動物園環境公園だった。もちろん、本書に多数紹介された写真のような同公園の様子など、私は一切しらず、本書を読んで、おお、そういう動物園だったんだとはじめて知った。そうそう、あの現場には、当該園の獣医師もいらして、サンドイッチを差し入れて下さったり、ヤマネの水槽を運んで下さったり、ご苦労されていたが、その方を第3著者に加え、Asakawaら(2006)を刊行、ご恩返しした。詳しくは浅川(2001)も参照されたい。

その野生動物医学の専門職大学院のメインのキャンパスは、当然ながら、ロンドン動物園である。ところで、本書には、不思議なことにこのメジャーな園に関し情報が極めて少ない。1, 2章の園の歴史に関わるところで、遺物の一例のような扱われ方をされている。もう、ロンドンは時代遅れなのか。p.6のビクトリア様式の建物は、現在も、使われているし。

この大学院の授業では、ロンドン以外でも行われたが、その一つがp.541で写真入りで紹介されているマーウエル動物園。保全教育の有力な拠点であるが、残念ながら、本書読者は、その直下の「園での職業」に目を奪われるので、ほとんど記憶に残らないだろう。それに、無名キーパー氏の非常に端正な顔立ちの写真があるので、なおさらだ。まあ、それは仕方ないとしても、ロンドン動物学協会の開講する専門職大学院についても、この章で紹介して欲しかった。このコースでは従来の獣医師向けのものばかりではなく、非獣医系のMSc Wild Animal Biologyも設置されたのだから。本書p.544「動物園看護師」のところに同協会HPのアドレスがあるから、ご自分でご確認を。ところで、この課程は、入学意志があっても、厳しい英語の試験に合格する必要がある。そのためにも、本書のような訳本では、専門用語には括弧で英語も記して欲しい。たとえば、p.547からの「用語集」には併記して欲しかったなあ(「ふれあい動物園」ってどんな英語なんだろう)。(文責 浅川)

#### 参考文献

- 浅川満彦. 2001. ロンドン動物園で、ネズミの線虫に遭遇する, 北海道獣医師会誌 45, 370-371.
- Asakawa M, Sainsbury AW, Sayers G. 2006. Nematode infestation with *Heligmosomoides polygyrus* in captive common dormice (*Musccardinus avellanarius*). *Vet Rec.* 158: 667-668.
- 石田 戠. 2010. 日本の動物園, pp.253, 東京大学出版会, 東京.
- 中川志郎 監訳. 2007. 野生動物の医学, pp. 802, 文永堂出版, 東京.
- Sainsbury, A., Mark T. Fox, 大平久子, 河津理子, 浅川満彦. 2001. 英

国王立獣医学校およびロンドン動物園による野生動物医学コースの概要と参加者の印象について. 獣医畜産新報 54: 801-812.